

カミ チンタ カンポン パリット ムントリ
Kami Cinta Kg Parit Mentri



第6回(平成9年度) 鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長・訪問団団長 弓場 秋信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会事務局長)

青年海外協力隊の活動現場に青少年を派遣し、開発途上国で顔の見える草の根国際協力を実践している隊員の活動を一緒に体験するとともに、学校訪問やホームステイにより訪問国の人々との交流を通して、国際交流・国際協力に対する理解を深め国際性豊かな青少年の育成を目的としたこの事業も、今年で6回目となりました。

過去の成果を踏まえ、今回より本実行委員会の単独事業から、県下市町村（今回は2市6町）との共催とし、また、訪問国でのホームステイ受入窓口を協力隊から現地の行政（今回はタイピン市）へと、この事業の裾野の拡大をめざした。

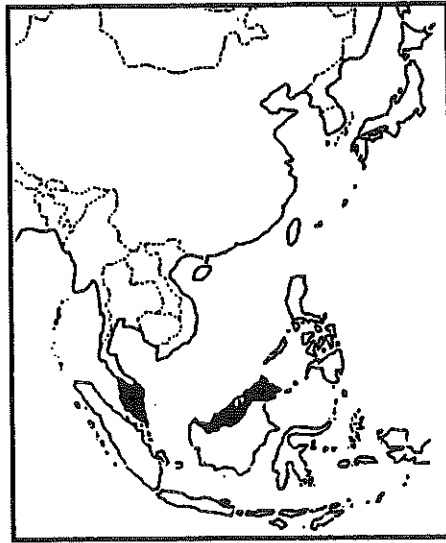
共催市町より推薦された11名の団員と、同行者5名（内マスコミより2名）はマレーシアの首都クアラルンプール、タイピン市、クアラカンサを訪問した。

タンピン市郊外のマレー人が住むパリット・ムントリー村でのホームステイ期間中、団員はこの国最大のマングローブ保護林で、自然保護と住民生活との共生について学び、そして沼池での植林、学校での同世代との交流、現地素材を使って手工芸センターでの製作体験。そして言葉・習慣・食事・宗教が異なる村での多くの戸惑いに直面しながらも、村民の笑顔と心暖まるもてなしに助けられながら乗り越え、異文化や異なる価値感の存在を体で理解していった。

作業療法士としてペラ州内18ヶ所の障害児ディケアーセンターの運営及び職員の巡回指導を行っている久米隊員、そしてクアラルンプールの中高等学校で日本語を教えている鹿児島県出身の田村隊員の二人の活動現場を訪問して、園生や学生との交流を行った。自らを厳しい環境の中に置き、目的を持って輝いている二人の協力隊員との出会いは、団員に多くの事を語りかけたようだ。

11名がそれぞれの動機を抱いて参加した8日間。出発の時の不安そうな顔が日が経つと共に消え、それぞれが新たな目標を見つけ自信にあふれる顔で全員無事に帰って来た。その日々を書き綴ったこの報告書「Kami Cinta Kg Parit Mentri」（我が愛するパリット・ムントリー村）が多くの皆様に読まれます事を希望致します。最後にこの事業実施にあたり私共の趣旨を理解しご協力頂いたタイピン市長及び家族の一員として受け入れて頂いたパリット・ムントリー村の人々、そして国際協力事業団の関係各位に心から感謝申し上げます。

マレーシア



目 次

◆はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員長 弓 場 秋 信

◆マレーシア地図

◆ごあいさつ 1

鹿児島県総務部国際交流課長 馬 場 英 俊

◆事業概要 2

事業趣旨, 事業主体

訪問団員名簿

訪問日程

◆行動の記録 5

◆訪問手記 13

私の新たな目標 荒 木 瑞 穂..... 13

言葉よりも心で 田 邊 優 子..... 14

笑顔あふれる青年海外協力隊員 上 薊 香 奈..... 15

マレーシアを訪問して 藤 田 尚 子..... 17

私の思い出 外 薊 舞 子..... 18

マレーシアの文化に触れて 大 迫 景 子..... 20

マレーシアで出会った笑顔 田 中 智 子..... 21

青少年国際協力体験事業に参加して 宇 都 怜 央 奈..... 22

マレーシアでの7泊8日 野 元 由 香 里..... 23

あったかい村パリット・ムントリー 今 屋 舞 利 江..... 25

青少年国際協力体験事業に参加して 有 薊 舞..... 26

◆マレーシアの遊び 28

◆同行記 30

青少年国際協力体験事業に同行して

鹿児島県国際交流協会 主査 宮 崎 剛

◆事業関連の新聞記事 31

〈表紙絵・・・宮薊広幸 青年海外協力隊鹿児島県OB会〉

ご あ い さ つ

鹿児島県国際交流課長

馬 場 英 俊

平成9年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

今日、世界は、環境問題、人口問題、開発途上国の貧困問題など困難な問題を抱えておりますが、一国だけでは解決することはできず、地球規模での対応が求められるようになってきました。こうした相互依存が深まる国際社会において、日本と開発途上国を含めた諸外国との協力関係はますます重要性を増しています。共存共栄という観点に立てば、日本の国際協力は相手国に貢献するだけでなく、日本自らの平和と繁栄につながるものでもあります。

今回の体験事業は、青年海外協力隊の活動現場に本県の青少年を派遣し、開発途上国の人々の新しい国づくりに協力している隊員と一緒に実際の活動を体験したり、農村にホームステイして地元の皆さんと交流することによって、国際協力に対する理解を深めることを目的としておりますが、時宜にかなったすばらしい企画であると思います。

この体験事業に参加された皆様の御報告をお聞きしますと、若者の純真な気持ちや溢れる情熱で、言語、生活様式、習慣、文化の壁を乗り越えることができる国際性豊かな青少年が着実に育っていることを実感いたします。今後、この貴重な経験を何らかの形で活かしていただけるものと信じております。

鹿児島県は、現在、青年海外協力隊の支援、海外技術研修生等の受入れ、鹿児島の青年の海外への派遣、香港、シンガポール及び韓国全羅北道との交流会議の開催や中国江蘇省との交流などさまざまな事業を実施しており、今後も「世界に開かれた南の交流拠点」として国際交流・国際協力を積極的に推進してまいります。

最後に、この事業を実施された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会、並びにこの事業の実施に当たり御支援・御協力をいただいた国際協力事業団及び青年海外協力隊の皆さんに心から敬意を表します。

事業概要

事業の趣旨

鹿児島県の青少年を、開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場や学校等を訪問し、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイを通じ異文化を体験し相互理解を深め、訪問地と鹿児島との親善を図ることなどにより国際性豊かな人材の育成に資するものとする。

事業主体

主 催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

《構成団体》

青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

(財)鹿児島県国際交流協会

共 催 鹿児島市，串木野市，東市来町，伊集院町，郡山町，日吉町，吹上町，金峰町

協 賛 (財)古謝育英会

後 援 国際協力事業団九州国際センター，鹿児島県，鹿児島県教育委員会

協 力 マレーシア大使館，マレーシア航空

訪問団員名簿

(訪問団員)

氏 名	学 校 名	学年	推薦自治体	備 考
荒 木 瑞 穂	玉龍高等学校	3	鹿児島市	
田 邊 優 子	鹿児島女子高等学校	1	〃	
上 菌 香 奈	鹿児島女子高等学校	2	〃	
藤 田 尚 子	串木野高等学校	3	串木野市	
外 菌 舞 子	串木野西中学校	3	〃	
大 迫 景 子	伊集院高等学校	1	東市来町	
田 中 智 子	伊集院高等学校	1	伊集院町	
宇 都 怜央奈	甲陵高等学校	2	郡山町	
野 元 由香里	吹上高等学校	3	日吉町	
今 屋 舞利江	吹上中学校	2	吹上町	
有 菌 舞	川辺高等学校	1	金峰町	

(同行者)

氏 名	所 属	備 考
弓 場 秋 信	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 (事務局長)	訪問団団長
宮 菌 夏 美	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
宮 崎 剛	(助)鹿児島県国際交流協会	
税 所 朋 子	(株)南日本放送	
柴 山 良 春	(株)鹿児島新報社	

訪 問 日 程

- 7月27日(日) 結団式(鹿児島空港国内線3FホールA)
福岡空港経由クアラルンプール空港着
(ホテル宿泊)
- 7月28日(月) 「国際協力事業団マレーシア事務所」表敬訪問
クアラルンプールからタイピンへ移動(貸切りバス)
タイピン市主催の「歓迎会」「ホストファミリーとの対面式」
パリット・ムントリーで「歓迎式」
(ホームステイ)
- 7月29日(火) ホームステイ先の「農園見学」
「マタン地区マングローブ沼地説明・植樹」,「木炭工場」見学
「タイピン市長」表敬訪問・「歴史,市政概要」説明
タイピン市内・動物園見学
(ホームステイ)
- 7月30日(水) 手芸センター見学・実習
「バトークラウ農業開発施設」
「博物館」見学
カンボン(村)主催のパーティ
(ホームステイ)
- 7月31日(木) チャッカット イボールの「農園レクリエーション」見学
モクタ ルンダサイエンス(MRSM)マラ校訪問・交流
「さようならパーティ」
(ホームステイ)
- 8月1日(金) タイピンからクアラカンサへ移動(貸切りバス)
「隊員活動現場一障害児デイケアセンター」訪問・交流
クアラカンサからクアラルンプールへ移動(貸切りバス)
国際協力事業団マレーシア事務所で「青年海外協力隊員との交流会」
(ホテル宿泊)
- 8月2日(土) 「隊員活動現場一スコラ セールプティズ(SSP)校」訪問・交流
クアラルンプール市内見学
(ホテル宿泊)
- 8月3日(日) クアラルンプール空港発
福岡空港経由鹿児島空港着
解団式(鹿児島空港内ロビー)

行動の記録

7月27日(日)

1日目

荒木 瑞穂

今日、いよいよマレーシアに旅立った。鹿児島空港には13:00に集合し、結団式で各自それぞれの抱負を述べ、14:35のANK764便福岡行きに乗り込んだ。マレーシアへは鹿児島から福岡経由でマレーシアという経路だった。鹿児島から福岡まで約1時間。福岡からマレーシアの首都クアラルンプールまでは約6時間。計約7時間の飛行機の旅となった。

今回のこの旅は今始まったばかりで何が起こるのか全く見当もつかないが、自分にとってプラスになることがあるだろうと思う。いろいろなものを見て、そしてそれを自分の中にどんどん吸収していきたいと思う。

福岡に到着し、制服から私服に着替え、国際線の方へ移動した。17:05のMH083便のクアラルンプー

ル行きに乗り込んだ。飛行機の中では各自これからのことをいろいろ話したりしていた。

22:30。いよいよマレーシアに着いた。日本とマレーシアの時差は1時間だから日本時間は23:30ということになる。空港についてからはいろいろな手続きがあったので、結局空港を出て、ホテルに向かったのは、23:30をまわっていた。空港から一歩外へ出ると夜だというのにムツとした。空港からホテルへ向かうバスの中からの風景は想像していたもの以上だった。私たちが泊まったのはメリアホテルというところだった。ホテルに着いたのは1:00を過ぎていた。ホテルに着いて、一部屋2~3人ずつ部屋を振り分けられ部屋に行った。

これからのマレーシアでの出来事を思うと少し不安ではあるがとても楽しみだ。いろいろなことをこれからの一週間でできるだけ多くのことを学びたいと思った。



7月28日(月)

2日目

田邊優子

マレーシアに到着して2日目。まずJICAマレーシア事務所へ行った。ここでは国際協力について日本とマレーシアの関係を聞くことができた。マレーシアは日本を手本として発展していることや、東京ガスの6割はマレーシアからきていることや、青年海外協力隊員のことについてなど色々とわかりやすく説明して下さった。

それから、いよいよホームステイ先のタイピンへバスで移動した。高速道路を走りながら、どんどん都会からいなかへ移っているのがわかった。

タイピンに到着。バスを降りると、歌や太鼓で出迎えてくれた。その歓迎ぶりに私は圧倒されてしまった。そしてホストファミリーとの対面式。自分のホストファミリーはどんな人たちだろうと胸はドキドキだった。すごく緊張したけれど、笑顔で接してくれたのでホッとした。それから一緒にバスに乗り、ホームステイする村の公民館へ行った。そこでも村の子供たちが、歌や太鼓で歓迎してくれた。村の説明をして下さった後、みんなでお菓子を食べた。聞いていた通り甘い物が多かった。でも、「甘ければ甘い方が歓迎してくれているということだよ」と教えてもらったことを思い出し、なんだか嬉しく

なった。

ついにホストファミリーの家へ行く時間になった。一軒の家に一人ずつなので私は不安でたまらなかった。家に着くなり、ママに「マンディ(水浴び)」と言われた。話には聞いていたけど仕方がわからなかったの、マレー語テキストを開き、「どうやっするの。」と聞くと、ママはマレー語で説明してくれたけど私には理解できなくて困った顔をしていたら、隣に住んでいるお姉さんと呼んできてくれた。そのお姉さんは英語が話せたので、英語やジェスチャーで一つ一つ教えてくれた。すごく嬉しかった。マンディを終えると、近所の子供たちが集まっていて、一緒に散歩に行った。やしの木やドリアンの木などたくさんの果物の木を教えてもらったり、いい香りのする花などを教えてもらったりした。外はうす暗くなり、夜市へ連れていってもらった。果物やお菓子などたくさんのお店が並んでいて、それに比例するようにたくさんの人がいた。まるで六月灯の出店のような感じだった。パパやママはランブータンやマンゴスチンなどたくさんの果物を買ってくれた。

家へ帰って、おみやげにもってきた英語版「鹿兒島」をひろげマレー語テキストや英語やジェスチャーを使って、教えてあげたり、家族の写真を見せてあげたりして、その日寝たのは午前1時を回ってしまった。



7月29日(火)

3日目

上 菌 香 奈

朝、寒くて目が覚めました。あれっ、ここはどこかと、一瞬焦ってしまいました。そしてマンディをなさいと勧められて、寒いし、冷たいしで凍えそうでした。ホームステイ先の方からそれぞれお弁当を作ってもらった私達は、まずマタン地区のマングローブ沼地へ行きました。そしてマングローブには森林保護や木炭作り、建築用の木材や、防波堤、木の根っ子は海老や小魚の生息地域にもなるなど、たくさんの目的があると知り、驚きました。木炭や木材には30年経ったものを使い、たくさん輸出するそうですが、日本もその相手国で、きっと安くで輸入するんだろうと思うと、申し訳なくなってきました。そして私達は植樹体験をすることができました。もちろん一本一本手作業で、泥の沼地に雨靴がはまったり、服に付いた泥もなかなか取れなかったりと、すごい重労働でした。しかし、10年後、20年後に自

分で植えたマングローブが立派に成長した姿を見に来れたらなと思うとすごく嬉しかったし、貴重な体験ができたと思います。次に私達はタイピン市長を表敬訪問しました。市長さんは私達の片言のマレー語での自己紹介を一人ずつ丁寧に聞いてくださり、とてもやさしそうな方でした。そして動物園へも行き、象や犀を触ることができました。ざらざらで固い肌には毛がピンピン生えていて、真近で見た動物の目はすごくかわいいでした。他にも珍しい動物がいっぱいいて、虎やライオンは野性的で勇ましく見えました。その後村へ帰り、夜のパーティーまで時間があつたのでマンディをしました。朝とは違ってすごく気持ちがいいでした。夜のパーティーではいろんなマレー料理がありました。サティー、ナシゴレン、そして日本ではめったに食べることのできないフルーツも食べ放題でした。パーティーの後は、村の子供達と遊びました。水掛けして走り回ったり、チョンカーというビー玉で遊ぶゲームも教えてもらいました。



7月30日(水)

4日目

藤田尚子

ホームステイ3日目。目覚めはトカゲや蚊等が夜中私を襲ってきたのであまりよくなかった。マレーシアの蚊は刺されると大きく膨れ上がり治りにくい。そのため私は目の上が大きく膨れ上がったまま村の中心地に集合した。道を挟んですぐの所に集合地はあるのだが、道を渡る所までエマ(お母さん)が見送ってくれた。

バスで移動して到着した場所はパリット・ムントリー(ホームステイ先の村)よりも非常に乾燥していた。その「手芸センター」ではアロエのような形のギザギザな植物を乾燥させて様々な色に着色したものを材料としてコースター、バッグ等を手作りで造っていた。私達もその村の高齢者の方に教わりながら小物造りに挑戦したが、非常に難しくただ高齢者の器用な手つきを眺めているばかりだった。そのような私達に村の方達は個々に小物をプレゼントしてくれた。

その後私達は博物館に行った。マレーシアの歴史や動物、果物等のことを詳しく知ることができた。なかでも昔の人々が使っていた道具等に興味を持って見ることができた。果物の豊富な国ということもあって果物のことが多く展示されていたことも私に

とって興味深かった。

次に「バトークラウ農業開発施設」に行き果物の女王様マンゴスチンについて学ぶことができた。資料やビデオ等で知ることもできたが味を確かめることでも充分知ることができた。

今日も様々な事を知ることができたことに対する満足感で充たされながらホームステイ先に帰った。いつもはエマ(お母さん)とパパ(お父さん)しか家にはいないのに毎日朝早くから夕方まで仕事で働いているカカ(お姉さん)も家にいた。マンディを済ませ一息ついたとき、私はカカ(お姉さん)が庭の掃除をしていることに気づいた。積極的に行動することを目標にしていた私はすぐに庭に飛び出して庭ぼうきを手に取った。庭は広く時間がかかり汗も多く噴き出したが私は自分が積極的に行動したこと、カカ(お姉さん)が喜んでくれたことで大変満足し感動した。

庭掃除が終わり村のパーティに行く準備をしなければならなくなった。汗をかいていたこともあって再びマンディをし着替えをしなければならなかった。マンディを済ませ部屋に戻ろうとしたときエマ(お母さん)が私にバジュクローンを手渡してくれた。私は大変感動し下手なマレー語でテレマカシ(有難う)を何度も言った。今日も充実した一日だったように感じた。



7月31日(木)

5日目

外 薊 舞 子

今日は、集合時間が10時だったので、隣にステイしている友達のところで、チョンカをしてから公民館へ行った。今日は、マラ校というエリートだけの学校を訪問するので、少し緊張している。

マラ校では、自己紹介をしたあと、学校説明をしてもらい、お互いの意見交換をした。私は、ここにもクラブがあるか質問してみた。すると、クラブはあるという答えが返ってきた。内容は、ホッケー・サッカー・バスケットボール・バレーボール・音楽などがあるという。私は、日本の学校とあまりかわらないんだなと思い、少し親しみを感じた。

学校案内の時間がきて、私たちは、この学校で生徒会役員にあたる人たちに案内してもらった。私のところに、メガネをかけた頭のすごく良さそうな男の人が話してきた。この学校の人たちは、とても英語がうまくて、すごく話しやすかった。自分の学校のことを話してくれるし、私の聞きとりにくい英語も聞いてくれて、バレーボールの話ですごくもりあがって、とても楽しかった。

昼食の時間は、みんなで日本のドラえもんの話とか、安室奈美恵の話などで会話がはずんだ。

帰りは、みんな外までみおくりに来てくれた。いつかまた会いたい。

〔バス移動〕

あ、もうさよならパーティーだ。一人で浴衣を着

れるか心配だな。家で水浴びをして、それから公民館へ行った。浴衣もうまく着れたし、準備は完了。次々に皆なの出しものがおわって、私の番になった。私は、タイピンという名前を漢字で、筆を使って書いた。

日本を出る前は、ホームステイするのが楽しみで仕方なかったのに、こんなに早く別れが近づいてくると悲しくて。家に帰って写真をたくさん撮った。こんな風にするのも今日で最後なんだな。

着がえをして、スーパーマーケットに買い物に行った。マレイシアになんと日本のプリクラがあった。それも日本語で言っている。すごく驚いた。

10時過ぎに家に帰ってきて食事をした。今日は、お肉やお魚とか色々な種類のおかずが並んだ。最後の夜だからかな。でも会話は、

「舞子は明日私たちとお別れだね。いつまたマレイシアに来るのかい。」

と、さびしいものだった。私もさびしいけど、子供がいないパパとママにとっては、もっとさびしいのかな。

12時頃団長の弓場さんたちが来た。その時、パパとママから、私が好きだと言ったチョンカと置物をプレゼントされた。

最後の夜だからいつもよりおそくまでおきて話をしようと思っていたけど、パパに、

「明日はやいから寝なさい。」

と言われ、私は1時前に眠った。最後まで私のことを心配してくれたパパとママ。



8月1日(金)

6 日 目

大 迫 景 子

今日は、ホストファミリー、そして村の人との別れの日です。

「帰りたくない。ずっとここにいたい。」今朝起きてからは、こんなことをずっと考えています。お父さんに「荷物を下におろしてもらえませんか。」と頼んだ時、「子供達の前で泣いたらだめだよ。」と私を抱きしめてくれました。きっと私は、涙目になっていたのかもしれませんが。子供達には、本当によくしてもらいました。村のパーティーの時、分からない事を教えてくれました。友達もたくさん紹介してくれました。そうやって、私一人に不安にさせないように気を使ってくれました。私のホストファミリーは、最高です。4日間ではあったけれど、この短い間に私は、いろいろな事を学びました。マレーシアの人々の笑顔のすばらしさ、大きな心の暖かさに感謝します。

久米隊員がいる「障害児デイケアセンター」を訪問しました。一目、久米さんを見た時、「ほっ。」としました。それは、何か安心する笑顔です。障害児の方は、私たちが歌と踊りで迎えてくれました。一

所懸命、体全部を使って表現していました。一緒に、折り紙で鶴も作りました。一つ一つ、ゆっくりと折っていきます。それができた時、本当に嬉しそうに笑うのです。私は、久米さんは毎日こんなに純粋な笑顔に囲まれて、活動されているんだなと思いました。

クアラルンプールに戻って来て、感じたことがありました。それは、今まで見てきた風景とあまりにも違っていたからです。初めて、マレーシアの首都を見た時は、「本当に、この国は発展途上国と呼ばれているの。」と聞きたくなるほどでした。でも今は、そう呼ばれるのも、なんとなく分かるような気がします。

JICA事務所を、再び訪問しました。ここでは、三人の隊員の方と話しをしました。協力隊員として参加した動機、そして活動している様子など興味のあることばかりでした。私もそんな話を聞いて、「いつか、こんなふうに協力隊員として何か役に立ちたい。」と思いました。これから進路を決めていく中で、三人の方との話しは、とてもよかったと思いました。

今日は、村の人との別れ、協力隊員の方々との交流、いろいろなことがありました。残りの2日間、マレーシアで多くのことを吸収したいと思います。



8月2日(土)

7日目

田中智子

5日ぶりにクアラルンプールに戻って来て、クーラーのきいた快適な部屋で朝をむかえた今日は8月2日。早くもマレーシアでの生活もあと2日となった。

ホストファミリーとの別れで、少々元気をなくしていた皆なも、今日は元気だ。

今日のスケジュールは、午前中は協力隊員の働くSSP校の訪問、そして午後は市内観光、ショッピングと、連日のハードスケジュールをこなしてきた私達にとっては、何とも楽しみな一日だった。

鹿児島県出身の日本語教師としてマレーシアに滞在している田村隊員は、心が大きく、サッパリした女性だった。「久しぶりに鹿児島弁がしゃべれるわ。」と笑いながら言った田村隊員のその顔は、今の生活にすっかり魅せられてしまっていることを物語っていて、今でも鮮明に記憶に残っている。

SSP校は、マレー系の女子のみが通える学校で、勉強にスポーツにと優秀な学校だ。タイピン市で訪問したマラ校といい、どうしてこんなにエリート校ばかり訪問するのだろうと、ため息が出てしまったほどだ。そして、マレー系の女子のみというのでわかるとおり、マレー人優先計画が行われている。

正直な所、女子校より男子校がよかったと思って

いた私だったが、その考えは一変した。休日にもかかわらず、私達を迎えてくれた年下の彼女達は、日頃学んでいる日本語を使って積極的に話しかけてきた。

最初は戸惑った私達も、すぐに仲良くなり、英語、日本語、ホームステイで鍛えられたマレー語を使って、おしゃべりに花が咲いた。全寮制という事や、五ヶ国語もしゃべれるなど、彼女達のことが少しづつわかっていくうちに、会話ができていく嬉しさよりも尊敬の気持ちが大きくなっていった。

『おはら節』を私達が披露すると、マレーシアの踊りを見せてくれた。実際、一緒に踊ってみて思ったのだが、私は、ここの音楽がとても好きだ。

その後チョンカーなどのゲームをして、お互いの住所を交換し合った。皆な、自分の名刺を前もって作っていて、コインや切手がついているものもあった。わたしがお返しに『ドラえもん』の歌を歌うと、みんなとても喜んでくれた。「手紙を書くからね。忘れないでね。」と約束して、私達はバスに乗り込んだ。

午後は、市内観光をして、お土産を買った。あまり時間がなかったけれど、何ととっても物価の安さには驚いてしまった。店の人との交流もあり、いい社会見学にもなった。

ホテルに帰ると、お土産の見せ合いとおしゃべりで、いつのまにか朝になってしまっていた。



8月3日(日)

8 日 目

宇 都 怜央奈

いよいよ帰国の日だ。でもマレーシアとの別れはとて寂しく感じられた。いざ帰国となると今まで少ししか感じる事のなかったマレーシアへ対する愛着が強く感じられて自分でもただ驚くばかりであった。

皆は2日続けての夜更けのチョンカー大会でとても辛そうだった。私も5時30分頃に寝たのだけれど初めてモーニングコールを自分で受けるという夢を果たし、電話の向こうで何を言っているのか理解できなかったけれどとてもいい朝を迎えることができた。今朝は出発が7時と早いために起きると服やホストファミリーからのお土産、家族や友達へのお土産などをスーツケースに無理矢理押し込み、朝食を取ると急いで空港へ出発した。空港へ向かうバスの車窓からは日本とは違う風景は勿論のこといろいろな民族や宗教・寺院などは、一目で分かるしバジュクローンを見ても違和感など感じなくなっていて国際人になれた気がして嬉しくなった。少し、もう少しだけマレーシアという国を満喫したいという気持ちが次第に大きくなっていった。

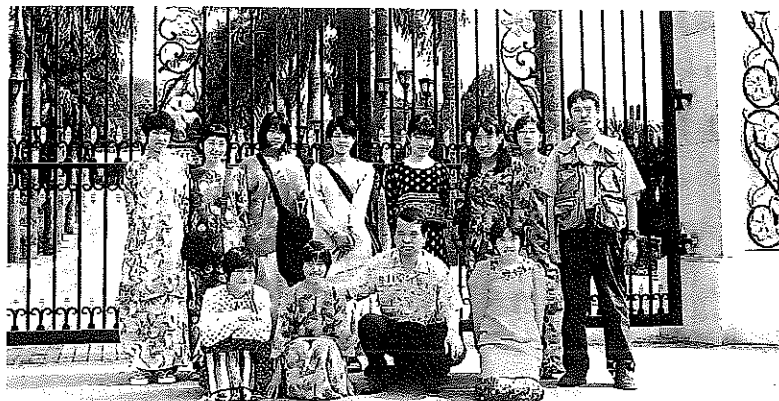
空港に着くとタイピン市でガイドをして下さった人とポリスマンが何人か見送りに来ていた。200キロもの道のりを私達とお別れをするために来てく

ださったのかと思うととても嬉しかった。そしてもっと嬉しかったことは無くしたと思っていた手帳を届けて下さったことだった。帰りの飛行機の中で辞書を引いたり、宮園さんに聞いたりしてホストファミリーにマレー語でハガキを書いた。

写真を撮ったり何かをやしている内に早くも福岡空港へ着いた。福岡はとて湿気が多く、気候的にはマレーシアの方がいいなあと思った。

福岡で乗り替えてやっと鹿児島へ到着した。空港には母と姉が迎えに来ていた。顔を見るととたんに足が軽くなり皆自然に笑顔がでてきた。8日ぶりとはいえ、家族との再会はとて嬉しくて、早くマレーシアでのことを話したくて車の中で一人でベラベラとしゃべり続けた。

日本に帰ってみると文化や言語の違いで苦しんだマレーシアでの苦い思い出が心地よく思い出されてくる。また機会をつくってマレーシアや他の国へ行ってみみたい気持ちが湧き起ってきました。今一番言いたい事は「百聞は一見にしかず」という言葉だ。マレーシアに行っ自分の物差しだけで物事をはかることは間違いだと強く感じた。まだ海外へ行ったことのない人は偏見など捨てて、行ってみるべきだと思う。この歳で海外へ行き異文化を体験でき幸せだと思う。この事業で学んだ多くのことをこれからの人生の中で最大限に利用していこうと思う。



私の新たな目標

荒木 瑞穂

(玉龍高等学校3年)



私はこの「青少年国際協力体験事業」に参加させてもらってマレーシアに行き、いろいろなことを自分の中に吸収して日本に帰ってくることができた。

私のこの事業への参加動機は、「将来、青年海外協力隊に参加して、自分のことを試してみたいけれど、まだ自分に何が出来るのか分からない。だからこの事業に参加して自分に出来る何かを見付け、自分自身をみつめ直したい。」ということだった。でもマレーシアに行って自分に出来ることを見付けて帰ってくることはできなかった。というのも、今マレーシアで活動している隊員の人たちが一同に口をそろえて言うことは、「協力隊に入りたから何かをするんじゃなくて、自分のしたいことをして、なおかつそれを試す為に協力隊に入るんだ。」ということだった。つまり私はマレーシアに行って自分に出来ることを見付けるのではなく、自分がしたいことを見付けなければいけなかったのだ。このことが分かっただけでも今回のこの事業への参加は私にとっては大成功だったといえる。

クアラカンサ地区障害児デイケアセンターを訪問した時、久米隊員と内藤隊員が私たちを出迎えてく

れた。2人は私たちにマレーシアのデイケアセンターのシステムについて話してくれた。マレーシアのシステムと日本のシステムには違いもあった。というのも日本の場合、養護学校は公立だがマレーシアの場合は半官半民の所が多い。だから日本の場合障害児と一般の人々との交流はどうしても少なくなってしまうがマレーシアはそうではない。先生の数も日本では一人の子供に一人の先生という感じだが、マレーシアは一つの学校に2～3人の先生しかいない。もちろん生徒の数は日本とあまりかわらない。どうしてそれでやっていけるのかというと、地域の人々の協力があるからだ。だからといって「本当に大丈夫なのだろうか。」とか「軽い障害を持った人が多いんじゃないのかな。」と思った。が、そうではなかった。かえって日本よりそのシステムは複雑だった。というのもマレーシアのデイケアセンターはいろいろな障害を持った人たちが一緒にいてしかも児童から大人までいるからだ。そんな中でやっていけるのはやはり地域の人々の協力があってこそだし、それほどデイケアセンターが地域に深く関わり、密着しているからのようだ。本当は日本もこうあるべきだと思った。

クアラルンプールに戻りJICAマレーシア事務所で3人の隊員と会い話しをした。今回この事業を通じて6人の隊員に会ったが、どの隊員も自分のしたいことができ毎日の生活が充実しているからかどうかは私には分からないけれど、とても素敵な笑顔だった。隊員たちの笑顔を見ているとこっちまで元気になれた。私もそういう笑顔の持ち主になりたいと思っただし、そうならなければならないと思った。

今回この事業を通してマレーシアに行くことができ、いろいろな体験をし、いろいろな人に会い、いろいろなことを感じ、考えさせられた。私自身少しではあるけれど自分自身に自信が付いた。そして6人の隊員に会って彼らの笑顔を見て改めて「青年

海外協力隊」に参加したいと思ったと同時に自分に新たな目標ができた。この新たな目標に向かってがんばろうと思う。この事業に参加することができて本当によかったと思う。

言葉よりも心で

田邊優子

(鹿児島女子高等学校1年)



機内でのアナウンスの声――。

「これはマレー語だよ。」

という言葉聞いて、自分の顔がだんだん青ざめてくるのがわかった。マレー語を7時間しか勉強していない私にとっては大きすぎる試練だと思った。

クアラルンプールからホームステイ先のタイピン市までの4時間、私はすごく落ちこんでいた。その絶望感が顔に出たのか、

「田邊さんは大丈夫？」

と何人もの人に言われた。

ホームステイ第1日目。私のホストファミリーは、パパとママとまだ小さい男の子二人と女の子、おばあちゃんの5人家族だった。ホームステイなんて初

めての私にとっては家に着いてからもおろおろしていた。するとママが

「マンディしなさい。」

と言ってきた。社会の教科書や、2回の研修で少しは聞いていたけど実際にするのは初めて。どうすればいいのかわからず、

「どのようにするの。」

と、マレー語テキストを見ながら言うと、ママはマレー語で教えてくれた。でも私にはもう限界だった。困った顔をしていると、隣に住んでいるお姉さんが来てくれて、英語やジェスチャーで一つ一つ丁寧に教えてくれた。私は覚えたてのマレー語で“ありがとう”を何度も何度も言った。

その夜、何か会話をしなきゃと思いお土産にもってきた英語版「鹿児島」を取り出した。パパは英語が少し話せたので、マレー語を片手に英語やジェスチャーも使いながら鹿児島のことを説明した。

夜も遅くなりパパが、

「まだ眠くないですか？」

と聞いてくれた。私は疲れていたけど、子供たちがまだ私の後ろで走りまわっていたし、自分だけ先に寝るのは悪いと思って、

「大丈夫。」

と言った。結局その日寝たのは夜中の二時ごろになってしまった。

ホームステイ2日目。その日の夜は、村の人たちみんなが集まって夕食をとった。そのとき私はショックな事を聞いた。

「あなたのパパはね、あなたがいつ寝たいかとか、どうしたいのかがわからないって心配していたよ。」

と——。私はなんだか悲しくなった。心配をかけてしまったこともだし、自分では一所懸命努力していたつもりが、まだまだ足りなかった。もっともっと頑張ろうと思った。

ホームステイ3日目。今日は家族で過ごす時間が多かったので近くの川へ行行った。日本の川の話をしたり、笹の葉があったので笹舟を作ったりいろいろ会話もできた。少しずつマレー語も聞き取れるようになり、嬉しくなった。

ホームステイ4日目。最後の夜。今日はいっぱい話そうと思っていたのに私は、じんましんが出てしまった。ママは心配して薬のようなものをたくさんつけてくれた。私が不安そうにしていると、

「大丈夫。大丈夫。」

と言ってくれた。最後の夜なのに心配をかけてしまった。

少し落ちついて、私が日記にその日見たものの絵

を描いているとパパが来てその名前を教えてくれた。私が聞き取れなかった言葉はスベルも書いてくれた。そんなになっているうちに、私は疲れてきたので、

「もう寝ていいですか。」

と聞くと、

「おやすみなさい。」

と言ったので私も、

「おやすみなさい。」と言って寝た。

とうとう帰る日になってしまった。朝からなんだかどんよりした気分だった。家を出る前にママが部屋に来て、

「また来てね。」

と抱きしめてくれた。涙がこぼれそうだった。

バスに乗る前、村の人たちと一人一人握手をした。私はついに泣いてしまった。ここを離れたくなかった。今日までの4日間で頭の中を駆け回った。思えば、パパとママには抱えきれないほどの愛をもらった。本当の子供のように。

行きの飛行機で不安がっていた私からみるとうそのように、言葉という壁は乗り越えられた気がする。人はいくら言葉や習慣が違っていてもわかり合えることがわかった。心と心で通じ合えた。なんといつでも、みんな同じ地球人だと強く強く思った。

今回のことは一生の宝物になった。

笑顔あふれる青年海外協力隊員

上 蘭 香 奈

(鹿兒島女子高等学校2年)

私が青年海外協力隊員になりたいと思ったのは中学生の時でした。その頃はただ、若い時にしかでき

なくて、人のためになって、英語を話せるようになりたいというたった三つの要因で決めていて、協力



隊員の事は、まったく知りませんでした。そして、この事業に参加させてもらい、実際に協力隊員の活動の様子を見ることができたし、体験談やアドバイスなど、いろいろと貴重な話を聞くこともできずごく勉強になりました。その中でも一番印象に残っているのが久米隊員の笑顔です。久米隊員は作業療法士として障害児デイケアセンターで活動されていたのですが、作業療法士としてだけではなく、障害児達と一緒に歌ったり、踊ったり、とても楽しそうで、常に笑顔で現地に自然に溶け込んでいました。私が思っていた協力隊員に対するイメージも変わってきました。今まで協力隊員は、作業服を着て、暑い日差しの中、汗を流して砂漠に木を植えるものばかり思っていたのですが、そうではなく、現地の民族衣装を着たり、活動しやすい自由な服装でいたり、外で活動する職種ばかりではなく、室内で活動するものもあるということ、そして、その職種も160種類もあり、55カ国に派遣されており、期間は2年間でその間は、よっぽどの事がない限り日本へは帰れないということ、シニア隊員制度や、協力隊員を支援している団体等もたくさんあること等を知り、ますます私の中で青年海外協力隊員になる夢はふくらみました。そして私達は久米隊員の他にもう一人、田村隊員の活動現場であるSSP校も訪問した。田村隊員はそこに日本語教師として派遣されており、やはり民族衣装であるバジューロンを着ていた。ここでは日本語を習っている中学生と交流ができ、私

はアシキンさんという方と一緒にいた。最初はお互い初対面で何を話せばいいのか迷っていたら、田村隊員から、

「何でもいいから、簡単な日本語で話しかけてごらん。」

と言われて、

「日本語の授業は楽しいですか。」

と聞いてみたら、

「はい、楽しいです。」

と返事してきました。「はい」と言ってくれたこともうれしかったけど、同時にきっと田村隊員は生徒達に分かりやすく楽しい授業をしているんだろうなと思いました。生徒達も私達が話す日本語を真似てみたりと、積極的に日本の事も良く知っていました。私はこの事業に参加するまでは、全くと言っていいほどマレーシアのことは知らなかったし、ましてやどこにあるのかははっきりしませんでした。これからは『国際社会の時代だ』とよく言われますが、その時代の流れに日本人はついて行くことができるのだろうか。

私のホームステイ先のお父さんもお母さんも、子供達もマレー語と英語の2か国語を話すことができました。しかし日本人は英語を習っても習っても普通に話せるようになる人はほんのわずかです。そう思うと日本人である自分が恥ずかしくなっていました。ところが、マレーシアでは今、2020年までに先進国の仲間入りをしようと、首相自らが「日本から学べ」と言っているようです。

今回マレーシアへ行って思ったことは、開発されている地域とそうでない地域とのギャップが大き過ぎるということです。私達はクアラルンプールとタイピンの二つの地域に滞在することができたのですが、この二つはまったく別の国のように感じました。東京に住んでいる人が鹿児島に来るとそんな感じがするのかな…。マレーシアにはマレー系、中国系、インド系の民族がそれぞれ個性を失わず、普通に一

つの国内に生活しています。不思議な事だと思いませんか。私は初めビックリしました。そして、そういう不思議な光景を見ながら、一週間で過ぎたわけですが、この短い期間に、実に多くの人達との出会いがあり、めったにできない経験をさせてもらい、両親、そしてお世話になった方々に、お礼を述べた

いです。今すぐにとはいかないけれども、いつかの体験を生かせる時が来ると思います。この1週間は一生の思い出となり、夢である協力隊員になることにも一歩近づけたような気がします。本当にありがとうございました。

マレーシアを訪問して

藤田 尚子

(串木野高等学校3年)



「ここもさっきいた所と同じ国？」マレーシアを見学するなかで何度も私はそう思った。バスで移動中、クアラルンプールでは私が見たこともない高層ビルが数えきれないほど林立していたかと思うと、木造の高床式風の建物の集落を通ったり一つの国で見る建物ではないような光景だった。

マレーシアの子供は日本の子供と同じように服を着ているので最初のうちはわからなかったが7泊8日の訪問のなかでマレー系、華僑、インドの人種の違いがだんだんとわかるようになった。顔、服装などでも区別できるようになったが、私たち日本人に対する態度でもわかるようになった。華僑の人々が

私たちに無愛想だったからだ。第二次世界大戦で日本がマレーシアを侵略したとき、日本人は中国人である華僑を特に傷めつけたという。だから、華僑の人々は日本人に対して冷たかったのだろうか？

私たちの世代は戦争を知らない。だが、この事実をふまえて仲良くする努力を怠ってはならないと思った。

7泊8日のうち4泊5日はホームステイ先で過ごした。ホームステイ先はマレー人の小さい村だった。その村は組織がしっかりしていて村長を中心に動いていた。そこで私たちは大歓迎を受けた。私がお世話になったホストファミリーは子供がいない三人家族だった。そのなかで子供のようにかわいがってくれた。村では毎夜、村の中心にある公民館でパーティーがあった。そのときはイスラム教の女性の方が着る肌をすっぽり隠すバジュケーロンという服を着せてもらった。

学校で英語を学ぶ子供がホストファミリーのなかになかったので会話はマレーシア語一つだった。初日はマカン（食べる）ミヌム（飲む）マンディ（水浴び）ティドゥ（寝る）の四つの言葉しか使わなかった。しかし、家の手伝いや食事を通してだん

だんお互いに心を開くようになった。言葉が上手く使えなくても気にならなくなっていった。

食べ物は日本の食べ物に似ているものは全くといっていいほどなかった。大変辛いか甘いかで、その中間というものはなかった。その食べ物をマレー人はスプーンや箸などの道具を使わず右手だけを使って食べていた。私も手で食べたが上手くいかなかった。何度も手の使い方を教えてもらったがどうしても上手くならなかったので、ホームステイ先のカカ（お姉さん）がスプーンを持ってきてくれた。果物は種類が豊富で私が見たこともない物が多かった。なかでも果物の王様と言われているドリアンは生まれて初めて口にした。香り、口あたり、舌触り何もかも私には合わず、一番嫌いな食べ物を見つけたような気がした。

6日目に海外協力隊員として活動している日本人々に会い、その活動現場を見せてもらった。協力している仕事は日本語を教える日本語教師だったり、障害児を世話する作業療法士だったが生き生きとしていた。そして、現地の人々に信頼され頼りにされていた。隊員の一人びとりが充実した日々を送っているように見え大変うらやましかった。世界がだんだん一つになってきているように感じた。これからもっともっとお互いの国の歴史や文化、風俗や風習、食生活などを熟知する必要があると思う。その第一歩として自分自身はその体験をすることができて大変よかった。私は将来青年海外協力隊の隊員になりたい。今回の体験でこの意志がさらに強まったように思う。

私の思い出

外 薗 舞 子

（串木野西中学校3年）



応募してみるだけしてみようかな。マレーシアについても、協力隊について何もわからなかった私が、まさかこの事業に参加できるなんて。先生に勧めら

れたのがきっかけで、応募した私も、一回・二回と事前研修に参加して、何を学びに行こうかを、自分自身考えるようになっていた。

二回目の事前研修の時、マレーシアでの食事の仕方にならって、私たちが右手を使って食事をした。初めての体験で、ご飯を熱いカレーと混ぜて食べるのは、とてもむずかしかった。マレー語の勉強をしたり、マレーシアについて説明をしてもらっているうちに、自分は、マレーシアの文化について調べてこようと思うようになっていた。そして、ホストファミリーやマレーシアの人たちには、日本の文化についても知ってもらえればうれしいとも考える様になっ

た。

2回の研修で、みんなと仲良くなれ、今、自分はどんな不安をもって、マレーシアではどんなことがしたい。などという話も自然にできるようになった。自分にとって、全く知らなかった人と友達になれたことは、とても心強いことだと感じた。

7月27日、たくさんの希望と不安を胸に、マレーシアへ向かった。

機内では、皆なとさわいでいたけど、やっぱりどこかに不安が残っていた。

福岡から6時間後、マレーシアに到着。その日は、ホテルに泊まった。

2日目の午前中に、JICAマレーシア事務所を訪れ、午後からは、ダイビンへ移動し、ホストファミリーとの対面式が行われた。とても歓迎され、私自身、とてもびっくりした。

私の家族には、子供がいなく、夫婦2人だけの生活だということが、会話をしているうちにわかった。子供がいなくて共通の話題がないかなと思っていたけど、やさしそうな人たちで安心した。

ホームステイ先で早速、私が日本からもってきた写真と食べ物を使って話をした。ママは学校の先生で英語が少しわかるので、英語も使って話した。梅干しを見て、不思議そうにしていたので、私が食べてみせると、ママも少しだけ食べてくれた。でも、すっぱかったのか顔をゆがめてしまった。この日の食事は、魚のフライや、煮た肉やスープをご飯にまぜて手で食べた。その後、隣に住むパパの兄弟の家に遊びに行った。そこには同じ団員の怜央奈が泊まっていた。チョンカというマレーシアの伝統的な遊びをしていた。私も、あまり意味がわからないままゲームをしていると、ゲームの仕方をマレー語とジェスチャーで教えてくれた。なんとなくだけ理解して、夜おそくまで遊んでいた。

3日目、マングローブの見学をして、実際に私たちもマングローブの種を植えてみた。私は宮菌さん

と一緒に植えてみたけど、力があるのにはとても驚いた。30年後、私たちが植えたマングローブが伐採されず、残っていればいいと思う。

4日、5日と過ぎ、ホストファミリーとのお別れの時がきた。ホストファミリーや村の人たちとたくさん思い出ができた4日間。初めて食べたドリアンの味と臭い、1日2~3回行った水浴び、そして紙のないトイレや手で食べる食事も、すべてが私の中にある思い出。何より感じたのが人のやさしさ。言葉は通じなくても気持ちは通じ合えるということが、この4日間で得たものだと思っている。泣かないと自分に言いかかせていたつもりだったけど、やっぱり涙が出てしまった。別れの時は、とてもつらかった。

悲しいまま、私たちは障害児デイケアセンターを訪れた。そこでは協力隊の久米隊員の話聞くことができた。久米隊員は、いつもにこにこ笑っていて、私から見ると、とても生き生きしていて、楽しみながら活動しているんじゃないかなとも思えた。久米隊員は作業療法士の仕事をしていて、子供だけではなく親との接触も設けて、一緒になって子供たちのケアに努めている。ここで私たちは、子供たちと一緒に歌を歌ったり、おり紙を折ったりして楽しい時間を過ごした。子供たちは、私が教えたことを素直に聞いてくれて、一つの部分が折れるごとに、ステキな笑顔でとても喜んでくれた。久米さんが今、こうした仕事を笑いながらできるのは、何かを教えて、その後にくる子供たちからの笑顔や喜んでる姿がとてもステキだから、充実した協力隊の仕事を、今現在も行ってもらえるのではないかなと思っている。

私はこの体験事業を通じて異文化にもふれることができ、それよりもたくさんの人々のやさしさにふれることができた気がする。

いつか必ず、マレーシアにいるホストファミリーに会いに行きたい。

マレーシアの文化に触れて

大迫景子

(伊集院高等学校1年)



私はマレーシアで今までにない貴重な、そしてすばらしい8日間を、過ごすことができました。

初めて見る、マレーシアの首都、クアラルンプールの風景。私が想像していたよりも、ずっと都会的で、高層ビルや世界一を誇るツインタワーなど、そのすごさに驚くばかりです。発展途上国と呼ばれる、マレーシア。一見、どうしてそのように呼ばれるのか、不思議になりました。

青年海外協力隊。私たちは、JICAマレーシア事務所を訪問しました。事前研修で勉強しましたが、ここでの説明はとても興味深いものがありました。中でも、「発展途上国のマレーシアを先進国の日本が、対等に尊敬しあいながら、互いに協力し合う。」というのは、私の思っていた「日本が教える立場」とは、全く違っていたので協力隊のイメージが変わりました。

隊員の方の、活動現場を訪問しました。「障害児デイケアセンター」にいる久米隊員は、笑顔のすばらしい方です。障害児の方と接することは、日本であっても大変なことだと思います。それを久米さんは海外で……。隊員の方々を見ていて、一つ気づいたことがあります。それは誰もが、本当に輝いてい

た事です。

一番心配していた、ホームステイの家族。両親と4人の兄弟の6人家族で、みなさんととても親切でした。私たちは、村をあげての歓迎を受けました。お世話になった村には、村長を中心として、子供からお年寄りまで仲が良く、その雰囲気がとても羨ましかったです。

マレーシアの女性は、「バジューロン」と呼ばれる、長い袖に長いスカート、そのうえ頭には大きな布を巻いています。これは、人に肌を見せない、イスラム教の人々の習慣です。私も、お母さんにこれしてもらいました。見た目は暑そうですが、実際に着てみると涼しいです。

イスラム教では、一日に5回、礼拝をします。その前に、マンディと呼ばれる水浴びを行い、身を清めます。私もマンディをしましたが、慣れないうちは難しいです。食事も右手を使って食べます。味は、辛いか甘いかわからないのですが、このどちらかです。果物は、日本では口にすることができない物がたくさんあります。ドリアンやマンゴスチン、果物の王・女王と呼ばれるものは、本当においしいです。

ホストファミリーとの別れの日、私は「帰りたくない。」こればかり考えていました。もちろん、日本にいる両親も大切です。でも、我が子のように私に接してくれた、お父さんやお母さんと別れるのも、本当に辛かったです。最後は、村の人がたくさん集まってくれました。「テリマカシー（ありがとう）。」「サマサマ（どういたしまして）。」こんな会話も自然とできるようになりました。マレーシアの人々の、大きな心とすばらしい笑顔、忘れることはできません。私の、この8日間楽しいことばかりでした。本当

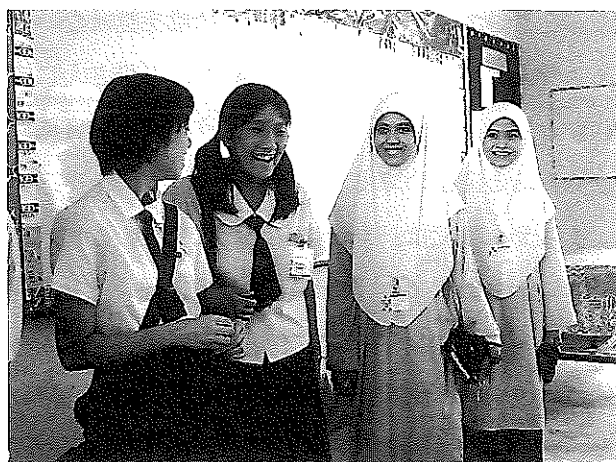
に、この事業に参加させていただいて心からよかったですと思います。異国の文化、宗教や食事、生活習慣に触れることができ、何かが、少し変わったような気がします。日本の裕福さが、改めて分かりました。「言葉などは関係ない。心を開けば、だれとで

もコミュニケーションがとれるんだ。」このことを、マレーシアの人々に学びました。マレーシアの方々の笑顔、私たちが心から受け入れてくれたことに感謝します。そして、お世話になった方々、本当にありがとうございました。

マレーシアで出逢った笑顔

田中 智子

(伊集院高等学校1年)



日本へ帰ってきて、もう何日たっただろう。マレーシアでの、左手を使わない風習や、親指で人を指す癖が少しづつ消え、何か悲しいような、寂しいような気分を感じている今日この頃だ。

マレーシアでの一週間は、互いの母国語と暑さとの戦いだった。二回の研修で、少しはマレー語を勉強したものの、本当にわたしのマレー語が通じるだろうか、ホストファミリーとの対面は、不安だらけだった。けれどそんな心配をよそに、5人家族で英語が通じないのはネネ（おばあちゃん）だけだったので、会話は、ほとんど、英語とジェスチャー、覚えたてのマレー語の単語をまじえたもので、幸い、意志の疎通は十分にできたし、生活で苦勞すること

も、それほどなかった。ただ、日本とは一味違う暑さと、毎日のハードスケジュールには、少しまいてしまったけれど、どこを訪問しても、あたたかい歓迎で迎えてくれ、たくさんの貴重な体験もできた。例えば、マングローブの植樹や、マレーシアでも一、二位を争うほど優秀な学校の生徒の交流。動物園では特別に象に触らせてもらい、皆なで触るというようなこともあった。どれも日本ではできない体験である。そして、一日の予定をおえて村に帰れば、村の人総出で作ってくれた食事でのパーティ。そんな連夜の村の人々との交流の中で、地域組織がしっかりしていることや、人としてのあたたかさを感じた。そんな折り、わたしは自分を反省する機会があった。それは、夜のパーティで、一緒にマレーシアにきている仲間の数人が、マレーシア独特の衣装、バジュクローンを着て来たときだった。わたしは、友人を見て、しきりに「いいなあ。わたしも着たい。」と口にしていた。すると、協力隊OBとして参加している方に、「人と比べないの。あんたの家では、あんたにだけの歓迎の仕方があるんだから。」と言われました。衣装を着せてもらっている友達をうらましがっているわたしを見て、一番気にするのは、わ

たしのホームステイ先のパパ、ママでしょう。わたしは、自分のことを実の子供のように優しくかわいがってくれるパパとママの前で、そんな軽はずみな態度をとってしまったことを、心から反省しました。

4泊5日のホームステイはあっという間で、わたしは、たくさんの思い出と家族からもらったお土産を抱いて、タイピン市を離れました。バスの中で、ネネからもらった小さな紙袋を開けて見たら、小さな、本当に小さな花の種が入っていました。それを見た時、優しさや素朴さを身にしみて感じ、枯れたはずの涙が、またこみあげてきました。

クアラルンプールに行く途中、障害児デイケアセンターという所に寄りました。障害児というと、暗いようなイメージを持っていたのですが、子供達は、とても明るくて、すすんで握手を求めてきたりもしました。わたしはとても驚いてしまいました。病名によって区別しないという事や地元の方々によって運営されているなど、日本が学ぶべきところも多々ありました。

日本人は、マレーシアの人々が日本の事を知っているほど、マレーシアの事を知りません。あるいは見下しているようなところもあるかもしれません。しかし、実際その国に行き、その国の文化や生活に、自分から心を開いて飛び込んでみると、そこは日本よりずっと幸せだったりします。わたしが、マレーシアで出会った人は、みんな素敵な笑顔をもっていました。言語や生活習慣が違って、笑顔は万国共通です。

この1週間、学んだことが多過ぎて、きちんと自分のものにしていくには時間がかかりそうだけれど、いつか協力隊員としてまた、素敵な笑顔をもつ人々に会いに行きたいです。そしていつか、マレーシアが、わたしの第二の郷里になったらいいなと思います。

最後に、10人の仲間と、この機会を与えてくださった方々に心から感謝したいと思います。ありがとうございました。

青少年国際協力体験事業に参加して

宇 都 怜央奈

(甲陵高等学校2年)



7月27日から8月3日までの8日間「青少年国際協力体験事業」の団員として赤道直下の国マレーシアで過ごしました。私がこの事業に参加しようと思った動機は小学生の時にポスターを見て青年海外協力隊の存在を知り、高校に入学し漠然と思っている時にこの事業を知りました。海外に憧れるという気持ちもありましたが一番の動機は協力隊の活動内容を自分の目で見たかったからでした。テレビで発展途

上国などの現状を見ることはあるけれど自分の視点からではそれらの国々を計り知ることができません。この事業を終えた今では何事も体験が必要だと実感しています。

事業の内容にはホームステイやマングローブの植樹、現地の学校との交流会そして青年海外協力隊員の方々との交流、活動現場訪問などがありました。私たちがホームステイしたカンポンはわりと裕福で庭にはバナナ、パパイヤ、やしなどの多くの果物がなっていて熱帯の風景に感動しました。しかし文化や生活習慣・宗教・気候・言語が全く違い大変戸惑いました。中でも一番困った事は食生活で甘口の私には堪えられないほどの辛さでお腹いっぱい食べることができませんでした。そのためホームステイ先のおばあちゃんは「家の孫（私のこと）は全然御飯を食べない。体がどこか悪いんじゃないか。」と心配をしていました。しかし果物は別でした。日本にはない初めて見、そして口にする果物ばかりでそれらの中で最も美味しかったのは「果物の女王」と呼ばれるマンゴスチンでした。少し時期が過ぎていたので一つしか食べられなかったけれども今までに食べたどんな果物よりも美味しかったです。又、困ったことは言葉が上手相手に伝わらないことでした。子供達は英語を話せるけれど大人達の一部を除いてはマレー語しか話せなくてマレー語の辞書を引ながらの会話はとても時間がかかりました。もっとマレー

語を学んで行くべきだったと何度も後悔しました。これからはいろいろな国の言語を進んで学び何年か経ってから再びマレーシアを訪れたいと思っています。マレーシアではドラエモンが大人気で他にもセーラムーンやスラムダンク、ドラゴンボールの本までありそれらについての会話も弾みました。短い期間ではあったけれど何事にも代えられない素晴らしい体験ができました。

私がこの事業の中で最も印象に残っていることは隊員の活動現場である障害児デイケアセンターを訪問し障害を持つ子供達と一緒に折り紙を折ったり歌を歌ったりして過ごした時間でした。ダウン症など、何らかの障害を持つ子供達なので普通の子供の様に折り紙を簡単に折ることが出来ないのだけれど、少しずつゆっくり教えてあげ折り上がった時の彼らの表情はとても嬉しそうに微笑んだり手をたたいたりして私の心も和みました。彼らの純粋な心に触れ、とても感動しました。

この事業に参加して青年海外協力隊員となるためには専門資格と経験が必要であるなどいろいろな事を知りました。今後の自分の進路を決定するのに有意義な旅となりました。私はこれから目標をしっかりと決めて頑張っていきたいと思います。最後にご協力・ご支援いただきました実行委員会そして郡山町に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

マレーシアでの7泊8日

野元由香里

(吹上高等学校3年)

私は自分にない何かを得たいと思って応募した。

待ちに待った出発日。実は行きたくなかった。全く



言葉も文化も違う国に行って無事に帰って来れるか心配だった。しかし、飛行機に乗ったら引き返すことができなく、行って勉強をするしかないため息まじりの気持ちだった。夜遅くマレーシアの首都「クアラルンプール」に着いた。バスでホテルに移動している時、外の光景を見ていた。多分、東京よりもきれいな夜景だったかもしれない。日本の企業、いわゆる多国籍企業が多かった。フジフィルム、キャノン、トヨタなどよく聞く会社名が目に入った。そのためか、半分は日本にいるような気がした。

7月28日からは、ホームステイが始まった。初めての体験づくしだった。水浴びのやり方がわからなかったが、ホストファミリーのママに教えていただきやっとわかった。ご飯も手で食べられるようになった。朝はにわたりの鳴き声で目が覚めた。そのうち1回は、5回の礼拝のうち1回だと思うが、男の人の声（多分お経）で目が覚めた。それが午前4時30分。もう一回寝ようとしたが、次はにわとりたちの会話（鳴き声）で寝れなかった。近所の幼い子供た

ちとも遊んだ。マレーシアの遊びを教えてもらった。毎日「ユカリ」と少なくとも15人程で呼びに来てくれた。英語もしゃべれる子が多く会話もはずんだ。生まれて二ヶ月の子も抱かせてもらって、写真も撮ってもらった。一番思い出になったのは、パパとママがとっても大切にしてくれたことだ。一番恥ずかしかったのは、水浴びの様子を取材されたことだった。

たくさんの所を見学した。全く違うことが多く、不思議に思いいくつか質問もした。驚くような答えが返ってくることもあったが、マレーシアの人はそれが普通なんだなと思った。その中でも、協力隊員の田村さんがいる学校を見学したことだ。中学校2年生なのに日本語をしゃべれて、日本語で自己紹介をしたカードももらった。授業の英語もわからない私には、頑張りを分けてもらった気がした。

約一週間を通して、私は人に優しく対すること、今の私に一番必要なことを得た。戦争中、日本人はマレーシアの人々にとってもひどいことをしたのにそれにもかかわらず、私たちを大歓迎してくれたマレーシア人は、海よりも広い心を持つてる人ばかりだった。

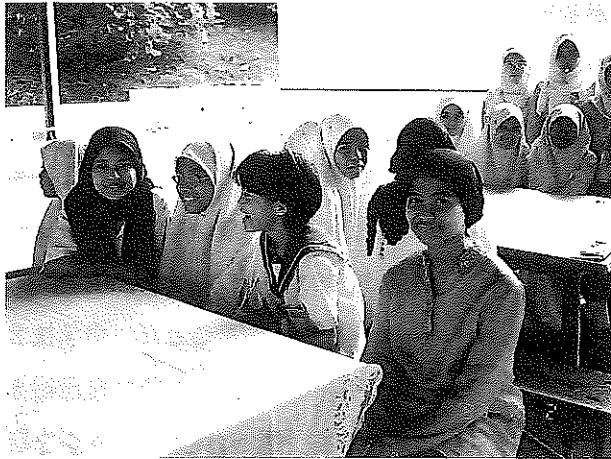
いい友達とも知り会えたし、学校では学べないことも学べた。今年の夏はとても貴重な体験ができた。これからも他の国にも興味を持って、行くことができたらいいと思う。もう一度ホストファミリーの所にお礼を言いに行きたい。

今回の貴重な体験。今後の生活にいかすことができたらいいと思う。

あったかい村パリットムントリー

今 屋 舞利江

(吹上中学校2年)



7月28日。今日から4日間、私たち鹿児島県青少年国際協力体験事業の団員は、パリット・ムントリーという村にホームステイすることになりました。

タイピン市で、ホストファミリーとの対面式があり、タイピン市からホストファミリーと一緒にバスで10kmのパリット・ムントリーという村へ行きました。村では、多くの人たちが歓迎してくれました。子供たちは、太鼓を打ちながら歌いだしました。横では、ブンガマンガールという大きながざりをもった人たちがいました。

それから、村の公民館の中で、いろいろ話がありました。話の間に、ヤシの実ジュースを飲みました。ヤシの実がそのままできて、ヤシの実の中央部に穴をあけて、そこにストローをさして飲みました。ポカリスエットのような味がしました。あれで、もっと冷たければ最高だっただろうな。それから、村の人たちの手作りのお菓子を食べました。日本にはない味のお菓子だらけでした。お茶が終わったら、ホストファミリーの家へむかいました。どんな家だろうと、ウキウキ気分でした。家についたらたくさんの人たちがいました。子供たちがたくさんよってきて、
「散歩、散歩。」

と言いました。マレー語で言ってるかと思って散歩ってどんな意味かなと考えました。分からなかったのので、私が「散歩？」と聞くと、「ヤー」と言いました。そして、歩いていくので、そのときやっと、日本語で話していたことに気が付きました。マレー語しか話せないと思っていたのに、日本語を話したので、とてもおどろきました。散歩をしながらいろいろお話しをしてくれました。とても楽しいでした。

夜、私がホームステイをしている家に、たくさんの子供たちが集まってきました。私が世話になっている家ってこんなにたくさんの家族だったけと思えました。初めて会った時、私が聞いたら、「リマ」といいました。五人家族のはずなのに。子供たちはノートと鉛筆を用意はじめました。なにをするのかと思うと、私に、日本語を教しえてといいました。私はOKというと、あいさつをおしえました。子供たちは、30分ぐらいで、五つぐらい覚えました。そして私に、「お名前は？」と聞いてきました。その時は、とても嬉しいでした。

あくる日の夜、公民館でパーティーがありました。私が家を出ようとしたら、ママが来て、ちょっと待てといいました。そして洋服をもってきて、着がえておいでといいました。その洋服は、マレーシアの民族衣装でした。それから公民館へ向いました。私の家の近所にとまっている、田辺さんと、野元さんも民族衣装でした。初めのうちは、涼しかったけど、後になると、熱くなりました。

8月1日、今日いよいよ村の人たちとお別れの日になった。言葉が通じなかったり、料理の味に慣れてなくて大変だったけど、この村と別れるのは、とても悲しい。村の人たち一人ひとりにあく手をしながら

ら、お礼をいった。みんなポロポロ涙を流していた。村長は最後まで笑顔を絶やさなかった。

ホームステイをすることによっていろいろなことを学び、そしていろいろなことを、教えてあげるこ

とができました。この体験は絶対に忘れないでしょう。

私が大人になったら、またこの村を訪れたいです。

青少年国際協力体験事業に参加して

有 蘭 舞

(川辺高等学校1年)



私はこの「鹿児島県青少年国際協力体験事業」に参加していろんなものを得ることができました。初めて体験することばかりで充実していた一週間だったと思います。

マレーシアに発つ直前になったら、いろいろ不安がでてきて行きたくなかったけど、飛行機の中で11人の仲間と話をしていたら他の人も不安を持っているのが分かったので少し安心しました。

研修の2日目から5日目まではホームステイでした。一応、少しはマレーシア語の勉強をしていたけどいざとなると全く話せませんでした。ホームステイが一番不安だったけどでも一番の思い出になりました。私のホストファミリーはお父さんとお母さんと妹の三人家族でした。家は広い果物畑の中に一軒

だけ建っていました。

ホームステイの1泊目は夜9時ごろ夜市に連れて行ってもらいました。夜市にはたくさん出店があって、人もたくさんいました。私はまずお母さんにバジューロンというマレーシアの民族衣装を買ってもらいました。そして、果物のお店でいろんな種類の果物を食べさせてもらって気に入った果物を買ってもらいました。いろんな果物の中で一番気に入ったのは果物の女王と呼ばれているマンゴスチンでした。とてもおいしくて日本に持って帰りたかったです。

2泊目、3泊目、4泊目は夜はずっとパーティがありました。マレーシア料理を目の前で作ってもらって食べさせてもらったこともありました。パーティでの一番の思い出は村の子供たちとマレーシアの遊びをしたことです。言葉は通じていないのに遊び方を理解することができました。特にチョンカーという遊びは帰りの飛行機の中や移動中のバスの中でみんなやって楽しかったです。

研修の6日目の朝はホームステイ先のパリットムントリーの人とお別れでした。そのお別れの場に来るまでは、あまり悲しくなかったのに村の人一人一人と別れのあく手をしているうちにいつのまにか

涙がでていました。お父さんとお母さんを見ただけで、涙があふれだしてきたので、はっきり言って自分自身が驚いていました。いつも、バイクで送り迎えをしてくれて、二人乗りができたことがすごくうれしかったです。

素晴らしいホストファミリーに出会えて本当に良かったです。たった4泊だったけど、私のことを本当の家族のように接してくれたお父さん、お母さん、妹に感謝しています。日本に帰ってきてから、ホストファミリーととった写真を見ていると、すごく会いたくなってホームシックにかかっていた。これからも、ずっと交流を続けて行きたいと思います。

そしてホームステイが終わり、私たちは6人の青年海外協力隊員に会いました。6人とも第一印象は顔がすごく輝いてるなあということでした。久米隊員が活動しているデイケアセンターと田村隊員が活動しているSSP学校を訪問しました。2人とも活動している姿がすごくいきいきしていていい表情をし

ていました。

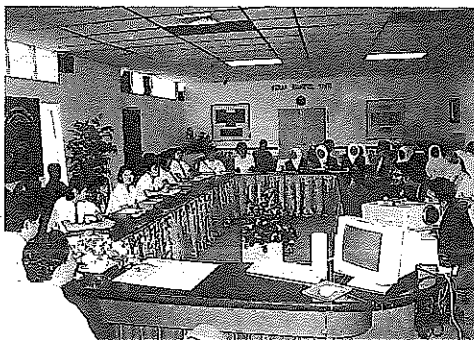
私が将来、どの職業につくか分からないけど、自分の進みたい道に行き、協力隊員のような人になりたいと思います。協力隊員への質問で、

「協力隊員になって後悔したことは何ですか。」
というのがありました。その答えは、

「毎日が充実していて後ろを振り向く時間ありません。」

でした。私もそれだけ充実した生活をしてみたいです。私は、協力隊員の前向きな姿勢を見習いたと思います。

こうして私たちは長い1週間をマレーシアで過ごしました。出発のときの不安感とは違って満足感をもって日本に帰ってこれました。この事業に参加して、いろんな人に出会っていろんなものを学べたと思います。これからも、このような事業があったら、ぜひまた参加したいと思います。10人の仲間とも、これからもずっと交流していきたいです。



マレーシアの遊び

団員達が帰りの飛行機の中でメモしたマレーシアの遊びを紹介します。

E malaysia 上 薊 香 奈 No.1
= マレーシアの遊び =

ルール 1. 何人でもできる。
2. 2チームに分かれて、それぞれリーダーを一人決める。
3. 地面に縦、横、線を引く。
(数は特に決まらないうが、人数が多いと、線も多くなる方がいい。)
4. 一方のチームは①から②へ渡り、もう一方のチームは、それをタッチして防がなければならぬ。
5. タッチされたら即、退場。
6. ①から②へ渡るのは、どこをどう通ってもいい。
7. 渡り、てくるのを防ぐチームの方は、ア～オの横線の上にそれぞれ横にしか運けないう。(リーダーは縦、横線の上ならどこでも運ける。)
8. 防ぐ人は後ろを向いてタッチしてはならぬ。
9. 一人でも②側へ渡るとか、できれば勝ち。
10. 多人数で、横線の数が多ければ多いほどおもしろいと思う。

E malaysia No.2

E malaysia 宇都 龍ノ

名前 → 知らない 必要な物 → ビー玉 (100個)
人数 → 2人 ~

まず「最初にビー玉を1つの場所に集める (ビリヤードの始まりのように) ちよと離れた所 (1~2m) に線を引く 線の所から1個のビー玉をもって (人間は立っている) ビー玉の集まりをめかけてはじく ビー玉集団に当たるとはじける

1.
2.
これらの (はじけた) ビー玉 (集団からはじけた) ビー玉をとる。そして次の人というぐあいに、なくなるまでやり、多くビー玉を取った人が Winner!!

E malaysia 宇都 龍ノ

* チョーカー *

1. 小さな穴にビー玉を7個ずつ入れる。2人で向かいあい自分から見て左側の大きな穴が「自分の穴」である。スタートの方法は、一緒に始めます。自分の手前にある6個ある穴から1つえらんで「次々に1つずつ入れて行きます。(7ポイントレスン→最初は右端の穴から取る) ビー玉のはいり穴に最後の1個を入れるとき、自分の障地で最後の1個を迎えるとき → 向かいにある相手の障地のビー玉を自分の物にできる

相手の障地で終わる場合このまま、何ももらえない 中 ↓ 略

最後は、おそくまで残っていた人のから!!

第2ラウンド
自分の穴からビー玉を7個ずつ自分の障地に入れていく、7個そろわなければ、あまたビー玉を大きな穴に入れ、穴をとる。そして前に勝った人から始める。

E malaysia 今屋舞利江 ☆NO-1☆

☆マレーシアの遊び☆

その1 → 名前... わかんない
(ケンケンゲ-4冊たいなの)

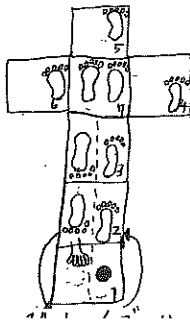
やり方... ワコの部屋を作る。



ワ番は、両足OK!
1~6番はケンケン

まず初めに、1番に石をなげる。

1番には足を3,おきれずに、1番をとばして、2番から順番にケンケンして行く。ワ番に来たら両足をついてもいい。そして3番、2番とケンケンで来る。そして、2番でSTOP片足のまま、1番にある石をとる。そして1番をとばして、スタート/ゴールまど来る。



ルールセツメイ

- 石は、1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. のマスの上になげ、そのはんどころにはいらなかつたらだめ。
- 3. のころとがしたり、前にあつたとき、足をふんだらだめ。
- たふさんといやると、相手の石が2にあると自分の石が1にある。をしたら、1と2をとばして3からはじめる。

E malaysia 今屋舞利江 ☆No-2☆

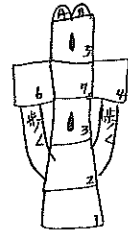
☆マレーシアの遊び☆

その1 → 名前... わかんない
(ケンケンゲ-4冊たいなの)

やり方... ☆NO-1☆のワコ

次は、2番、その2番3番... とやっていく。2番に石をおいたときは、1番には、足を片足ついてもOK。

そして、自分の石が3番、相手の石が5番にあるとちる。2から4まどは、トオアのど2から4まどの道のりができる。それを歩いて行くことが出来る。



ルールセツメイ

- 石をかく石のある所にはいったらだめ。(行く時) して、ふえつてくるとき石をとってふえつてくる。
- 最後まどいたら、ABに行つておわり。

E malaysia 今屋舞利江 ☆NO-3☆

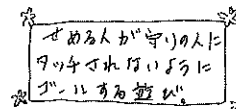
☆マレーシアの遊び☆

その2 → 名前... なわとび

やり方... 日本とおなじ

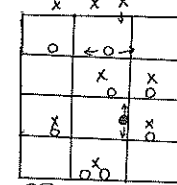
※日本とおなじだ。たけ、あやとり、にいゅうとび、うしろとび、は、できなかつた。(マレーシア) 中うばんやさんをしていた。でまうたはマレー語。

E malaysia



人数の決まりはなし。

※おま"2つのグループに分かれます。(せむるグループと守りのグループ)



- そして、線を引きます。(人数によって線の数を増したり、少くしたりします。だいたい1本の線に守りが2人)
- 守りのグループは、リ-ア"を1人決めます。

せむる人... X
守りの人... O
(1-9)... ●

- せむる人
- 守りの人にタッチをされたら線の外へ出ます。
- 守りの人

MEMO
日本の面取りに似ている。

- 前に手を伸ばしてタッチしたり、うしろの人をタッチするこはだめ。
- リ-ア"は、全員の線の上を歩かなくて、リ-ア"以外の人は自分の出ている線の線の上しか歩かなくていい。

おわり... 名前... わかんない

- せむる人が1人でゴールしたら勝つ。
- せむる人が全員ゴールしたら、守りの人が勝つ。

記録者
田邊 康子

「青少年国際協力体験事業」に同行して

(助)鹿児島県国際交流協会

主査 宮崎 剛

マレーシアの農村でのホームステイ。食事、トイレの問題等々。青年海外協力隊のOBでもなく、海外へ行くのがわずか2回目という私は、出発前不安でいっぱいでした。いまだ見たことのない地に対する過剰な不安に翻弄されつつも、最後は「なんとかなる」と自分に言い聞かせて、また職場の頼もしき同僚に励まされ7月27日日本を後にしました。

7月28日クアラルンプールのJICAマレーシア事務所を訪ね、山田次長よりマレーシア事情について説明を受け、また団員に励ましの言葉をかけていただきました。「海外は実力の世界」であり「言ったことはきちんと実行しているか」「英語はできるか」などが評価されるとのこと。国際協力に関しては、「日本がもし困ったとき、マレーシアは日本を助けてくれる国の一つ」という言葉が印象に残りました。

JICAマレーシア事務所訪問の後、高速道路を北上すること約4時間でタイピン市に着き、市庁では盛大な歓迎を受けました。また同時にホストファミリーとの対面式が行われ、団員それぞれ緊張しつつもさっそく身振り手振りでホストファミリーとコミュニケーションを図っていました。私はカンボン・パリット・ムントリーの村長宅に鹿児島新報の柴山記者とホームステイすることになりました。ホームステイ初日の夕食中突然村が停電となり、ろうそくの灯りを頼りに、右手を使ってやや恐る恐る料理を口に運ぶこととなりました。団員たちは体験事業の当初はマレー料理の辛さ、パームオイルの匂い、日本とはだいぶ違うばさばさした米に抵抗がありましたが、すぐに慣れ「郷に入らば郷にしがえ」を実践していました。ホームステイ期間中、村の子供たちと団員らがゲームを通じて交流している姿は、強く印象に残りました。双方、言葉は通じなくても身振り手振りでコミュニケーションし、笑い声が夜おそくまで続きました。

7月29日から8月2日にかけて、マングローブ植林、手工芸体験、タイピン市勢の学習、学校訪問、フェアウエルパーティーなどのスケジュールを終え8月1日タイピンを後にしました。タイピンのカンボン・パリット・ムントリーを離れるとき、団員らは改めて村人の温かさに触れ、涙の別れとなりました。

タイピンを離れ、青年海外協力隊のクアラカンサーの久米隊員、クアラルンプールの田村隊員の活動現場をそれぞれ訪問しました。久米隊員が障害児に対して温かいまなざしで接している様子や、田村隊員の日本語教師としてのきびきびした指導ぶりなど、団員にとって心洗われるものがあったことでしょう。自分の考えをしっかりと持ち行動している2人の女性青年海外協力隊の姿はとてすがすがしいものがありました。

8日間のマレーシア体験をこなした団員たちは、みな今までにない何かを感じはじめていたようでした。2回の国内事前研修で団結力を強め、みな「協力」して8日間の体験事業を経て、何かしら自信をつけたことは間違いありません。異文化に触れ国際交流・国際協力について何かを体得したに違いありません。日本の外の世界に触れ、改めて日本を見つめ直すことにもなったでしょう。団員たちのこの1997年夏の体験がいつの日か“発酵”し、青年海外協力隊員として活躍したり、あるいは国内において国際交流の仕事に携わったりする人が出てくることを願ってやみません。

今回この元気印の11人の団員、沈着冷静な弓場団長、通訳や団員のお母さん役となった青年海外協力隊員OGの宮蘭さん、ホームステイ先では寝食を共にした鹿児島新報社の柴山記者そして小柄ながらビデオカメラを一人で回し続けた南日本放送の税所記者と共にマレーシアに行く機会を持つことができたことは、私にとって生涯忘れえない体験となることでしょう。出発前の私の不安は、実際“行って見て”どこかへ吹き飛んでいました。

最後に今回のこの事業に御協力御支援いただいた方々に厚く感謝申し上げますとともに、この報告書が多くの方々、特に青少年に読まれますことを期待いたします。

Kami Cinta Kg Parit Mentri

第6回 鹿兒島県青少年海外協力体験事業報告書

編集発行 鹿兒島県青少年国際協力体験事業実行委員会

平成9年10月20日発行
